文京区認知症施策検討専門部会資料

2019．8.30

認知症になっても人として尊重され、希望を持って自分らしく生きることができる文京区

●誰もが認知症の正しい知識を持ち、どのような支援が受けられるかを知っている文京区
●適切なタイミングで適切な支援につながり、切れ目なく支援が提供される文京区
●認知症であってもそうでなくても、「お互いさま」と当たり前に支えあう文京区
●認知症の本人を支える家族の生活と人生に、充分配慮された支援のある文京区

◆普及・啓発の推進

◇認知症講演会

	H26	H27	H28	H29	H30
開催回数	6回	9回	8回	8回	5回
参加者数	346人	182人	109人	178人	153人
平均参加者数	57.7人	20.2人	13.6人	22.3人	30.6人

◇認PAKU～認知症に寄り添う介護機器展～

	H27	H28	H29	H30
参加者数	343人	396人	380人	493人

◇認知症サポーター養成講座

	H26	H27	H28	H29	H30
開催回数	37回	62回	45回	54回	42回
区民	190人	282人	276人	318人	455人
学校	213人	406人	573人	785人	360人
企業	783人	1,842人	494人	542人	499人
合計	1,186人	2,530人	1,343人	1,645人	1,314人

◇認知症サポーターステップアップ講座

	H26	H27	H28	H29	H30
参加者数	48人	15人	6人	43人	53人

◇講演会

2019年度日常生活4圏域合同講演会は、認知症のご本人をゲストにお迎えし、医師・家族介護者との対談形式での講演会を企画する。認知症を自分事として捉え、一般区民、関係者等それぞれの立場で認知症を正しく学び、認知症を自分事として考えるきっかけとすることを目的とする。

◇認PAKU

在宅生活をサポートする機器展示のほかに体験型・参加型のプログラムを充実させ、認知症を身近に感じていただくイベントを企画する。

◇認知症サポーター養成講座・ステップアップ講座

通常の講座では、普及啓発として認知症の基礎知識を学ぶ講座と認識する。ステップアップ講座では、地域や所属する団体での認知症の本人のサポートについて体験を通して考えるプログラムや実際に活躍する場も提供する。

認知症サポーター養成講座開催時に、受講対象者に合わせて内容を構成している。企業・職域向けには、講座用事例DVDと活用ガイドの貸し出しについて情報提供を実施している。

地域のサポーター増に向け、商店会連合会に向け講座申込について周知を実施している。

小中学生向けの養成講座では、周知について工夫し（年間複数回の周知の実施）開催校の増を目指し、保護者層も巻き込んだ普及啓発に取り組む。現在、区立・私立・国立小中学校への周知を実施している。

◇認知症パンフレット等による啓発

◇認知症パンフレットによる啓発

普及啓発に有効な媒体としてのパンフレット内容についての検討及び、支援を必要とする人が適切な時期に必要な情報にアクセスできる有効な媒体となるようなパンフレット内容について随時検討を重ねていく。

また、配架だけでは積極的な普及活動とはなりにくいため、人を介在させ支援を必要としている方に直接手渡しできるように、支援の担い手（ボランティア等）として活躍されている区民の方への周知も継続していく。

◆切れ目ない支援体制づくり

◇認知症早期診断・早期支援推進事業

◇認知症相談機能強化～H26年度から認知症支援コーディネーターを配置し個別支援や認知症施策を推進～

	H26	H27	H28	H29	H30
認知症支援CO対応件数（延）	155人	293人	592人	738人	856人
認知症相談件数（延）	1,793人	2,785人	3,317人	3,920人	3,873人

◇もの忘れ医療相談～H26年7月より認知症サポート医を区の嘱託医として高齢者あんしん相談センターに配置～

	H26	H27	H28	H29	H30
来所相談	29人	45人	36人	43人	28人
訪問相談（再掲）	7人	16人	13人	12人	2人

▼もの忘れ医療相談累積相談結果（H26．7～H30まで）

助言	要医療	方針確認	介護保険	その他
88人	71人	19人	7人	5人

▼もの忘れ医療相談“要医療”と判断された方のその後の状況

	H26	H27	H28	H29	H30
受診他	2＋	2＋	10	12	4
状況	・嘱託医、他の専門医、介護保険申請など				
未受診	0	0	7	7	2
状況	・支援拒否のため、介入の時期を検討している ・かかりつけ医での受診継続 ・介護保険申請支援　など				

◇もの忘れ医療相談

区民・在宅生活者という対象の条件以外は、枠組みを設けず認知症相談と支援の入り口及び、高齢者あんしん相談センターの事業や機能を知っていただく事業として、幅広く相談を受け入れていく。この相談は認知症初期集中支援事業対象者を選定し多職種連携により支援を展開していくための入り口ともなる。

区報、ホームページ、関係機関への周知の他に地域で活躍されている各団体にも周知を実施していく。

◇東京都認知症アウトリーチ支援事業対象者

	H26	H27	H28	H29	H30
事例数	1人	1人	1人	2人	1人

◇東京都アウトリーチ支援事業と認知症初期集中支援事業の関係性について

認知症に関わる専門医療機関として、H27年度から東京都認知症疾患医療センターが整備され、そこに認知症アウトリーチチームが配置された。認知症アウトリーチチームは、①認知症初期集中支援チームだけでは対応が難しい人等への訪問支援、認知症初期集中支援チームの活動支援。②認知症疾患医療センターの訪問相談等を活用し、地域の支援体制を充実。と位置付けられている。

今後も認知症初期集中支援チームの後方支援という位置づけで協力を依頼し、ご本人及び家族への適切な支援を実施するため、アウトリーチ支援事業を有効活用していく。

◇文京区認知症ケアパス検討専門部会→H30年度より文京区認知症施策検討専門部会

	H27	H28	H29	H30
部会	5回	2回	2回	2回
分科会	6回			

◇認知症施策検討専門部会

“認知症になっても人として尊重され、希望を持って自分らしく生きることができる文京区”を目指すため、認知症のご本人と地域の中で様々な立場で活躍している部会委員との意見交換を行う機会を設け、現実的かつ積極的な検討を行う会議体を目指す。

◇認知症初期集中支援推進事業～H29年10月より多職種連携による認知症支援の開始～

本　人	チーム員訪問	チーム員会議	方針決定	最長6ヶ月の支援
・認知症ではないかと心配 ・認知症と診断されたが この先どうしたらいいの？	・情報収集 ・アセスメント	・支援方針検討 ・具体的な支援計画 ・役割分担 ・評価時期の設定 ・中間評価 ・疾患の鑑別 ・対応方法の確認	・社会資源利用調整 ・医療介護連携 ・東京都アウトリーチ支援事業の利用調整	・必要に応じて通常支援を継続 ・他の社会資源利用調整
家　族				
・認知症かも？と思うが本人が受診を嫌がる ・認知症と診断されたが家族としてどう支えれば・・				
その他				
・社会の中で孤立しており必要な支援にアクセスすることが難しい状況にある				

【チーム員構成】
認知症サポート医、認知症専門医、認知症支援コーディネーター、社会福祉士、認知症地域支援推進員

【H29年度及びH30年度実績　／　事業対象者：H29年度12名、H30年度12名　】

世帯	H29(10~3)	H30
独居	8	6
夫婦	2	4
同居	2	2

対象者性別	H29(10~3)	H30
女性	3	4
男性	9	8

年齢構成	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代	90歳代	平均年齢
H29(10~3)	0	0	3	8	1	81.8歳
H30	2	1	3	5	1	77.3歳

	チーム員訪問		①チーム員会議		②チーム員会議		支援期間
	回数	平均	回数	平均	回数	平均	平均
H29(10~3)	30	2.5回	19	1.6回	5	0.4回	111.7日
H30	19	1.6回	39	3.3回	3	0.3回	229.6日

	同意書		長谷川式		ザリト		ダスク		認知症日常生活自立度
	有	無	有	平均	有	平均	有	平均	Ⅱ以上
H29(10~3)	6	6	6	16.3点	4	15.8点	8	46.8点	9
H30	7	5	5	10.0点	5	11.0点	7	44.6点	7

	認知症診断	認知症以外診断（重複）	不明	医療連携票	継続中	終了
H29(10~3)	11	6	0	2	4	8
H30	10	0	2	0	8	7

支援終了者の状況H29.10～H30(重複あり)➡

施設入所	介護保険申請	専門医療機関	死亡
2人	8人	3人	4人

【チーム員の評価】

- 認知症初期集中支援事業についての理解を促し、チーム員以外からも対象事例が選出されるような仕組みづくりが必要
- チーム員がそのまま対象者のメイン担当になることが多いため、チーム員が本事業をコーディネートできない状況がある

◆地域での日常生活の支援の充実・家族支援の強化

◇認知症カフェ『ぶんにこ』～文京区認知症コミュニティ～

	H26	H27	H28	H29	H30
開催回数	6回	20回	22回	50回	48回
参加者数	128人	257人	319人	1,115人	908人
平均参加者数	21.3人	12.9人	14.5人	22.3人	18.9人

◇認知症家族交流会

	H26	H27	H28	H29	H30
開催回数	12回	8回	8回	8回	8回
参加者数	76人	46人	53人	64人	58人
平均参加者数	6.3人	5.8人	6.6人	8.0人	7.3人

◇認知症介護者教室

	H26	H27	H28	H29	H30
開催回数	4回	9回	8回	8回	8回
参加者数	60人	156人	202人	133人	186人
平均参加者数	15.0人	17.3人	25.3人	16.6人	23.3人

◇認知症カフェ

認知症カフェは、地域の中にある拠点として、認知症のご本人も家族も関係者も地域の誰もが気軽に集える居場所である。今後は認知症支援のボランティアとして家族介護者及び認知症の本人が活躍し、地域のさまざまな情報が得られる場所として充実したカフェを展開していきたい。

◇認知症家族交流会・介護者教室

アンケート結果によると、家族介護者は集える場所を求めている人も求めていない人もいる。文京区に家族会はないが、現状の規模で交流会を開催しながら家族会立ち上げの必要性が生じたときは迅速に対応する。

◇行方不明認知症高齢者ゼロ推進事業

◇靴用ステッカー及び衣類用アイロンシール配付状況

	H27	H28	H29	H30
靴ステッカー	53人	49人	37人	36人
アイロンシール	46人	41人	30人	34人

◇SOSメール事前登録事業＋SOSメール配信

	H27.7	H28	H29	H30
事前登録者	38人	73人	90人	73人
メール協力者	434人	549人	603人	640人
メール配信	6回	10回	5回	3回
協力者による発見	2人	0人	0人	0人

◇徘徊探索サービス

	H27	H28	H29	H30
新規申請	1人	3人	4人	1人
利用者数（年度末）	3人	5人	8人	6人

◇生活環境維持事業

	H26	H27	H28	H29	H30
利用者数	0人	0人	0人	1人	0人

◇うちに帰ろう模擬訓練

	H27	H28	H29	H30
参加者数	94人	106人	71人	43人

・普段から顔の見えるオープンな地域づくりが大切
・認知症を自分たちの地域で自分事として捉えることが大切
・町会のイベントにも参加して顔を覚える、覚えてもらう
・顔の見える関係をつくる地道な活動が大切
・挨拶とコミュニケーション
・憩いの場所を地域につくり、顔なじみになり、世間話から相談へつなぐ
・となり近所での情報共有することの大切さ
・こうした訓練により心配な方に声をかける勇気を得た
・声かけが命を救うきっかけになり得ると感じた

◇行方不明認知症高齢者ゼロ推進事業

靴用ステッカー・衣類用アイロンシール・SOS事前登録事業・徘徊探索サービスは事業周知が課題。
加えて、SOSメール配信事業は効果的に活用できる仕組みづくりが必要、徘徊探索サービス事業は利用者ニーズに即した内容の見直しを検討中である。

・うちに帰ろう模擬訓練

参加者は、この事業の本質である地域づくりの重要性や日頃からのコミュニケーションの重要性について訓練を通して実感した。この事業はこの規模の訓練としては年1回としつつも、地域のさまざまな団体（マンション管理組合、各高齢者団体、各相談応需の企業の窓口など）内での小規模な単位でも実施されることが望ましい。